

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【土屋中学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策	
知識・技能	本校の課題は、基礎事項の定着不足が顕著である。国語では語彙・文法・言語文化領域、数学では「数と式」「データの活用」と基礎的内容のつまづきが積み重なっている。そこで次年度は、継続して力を入れている話し合い活動を“基礎知識の運用”に直結させる授業設計が重要となる。例えば語句カードを用いたペア説明、数学の計算手順を互いに言語化する“ペア解説”、理科・社会の用語を因果・分類で関連づけるミニ対話など、生徒同士が説明し合うことで知識の再構成を促す。また数学科では習熟度別学習を導入し、基礎定着が不十分な生徒には段階的課題と対話型の確認指導を行い、上位層には応用問題を話し合いながら深く時間を確保することで、全体の底上げと伸長の両立を図ってきたい。	
思考・判断・表現	本校の課題は、学年を追うことの思考・判断・表現の急落である。国語の記述、数学の関数・記述、社会「歴史との対話」、理科の考察など、複数教科で大幅な差が確認される。次年度は本校の強みである話し合い活動を“思考の見える化”に用いることが鍵となる。国語は「引用→理由→結論」の型を使ったペア記述、社会は資料をもとに因果を組み立てるグループ対話、理科は結果と仮説の関係を説明し合う考察交流など、対話を通じて思考の構造化を促す。また数学では習熟度別学習を活用し、基礎層には「なぜその式になるか」を言語化する対話中心の支援を、上位層には複数解法の比較対話を行わせることで、表現力を段階的に育成できる。話し合いを“思考の枠組み”として活用することで、全教科での改善に直結させていきたい。	

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 基礎的・基本的な知識・技能習得状況において、個人差が大きいが、また、家庭学習の定着に課題が見られる。 <指導上の課題> 基礎的・基本的な知識・技能習得に向け、反復練習をする機会が授業内外で少ない。また、家庭学習を定着させるためのアドバイス等を授業の中で十分に行っていない。	⇒ 「スタディサプリ」「ドリルパーク」等、知識・技能を育成する教材を活用し、授業内だけでなく、課題として配信・配付することで、基礎的・基本的な内容の反復練習の機会とする。【1か月に1度以上】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 資料を活用した意見伝達において、その言葉遣いに誤りがあったり、他教科への応用に繋がるといって課題があった。 <指導上の課題> 相手より正確に伝わるような表現について考えさせる授業を展開したり、教員によるきめ細やかなフィードバックをしたり等の指導が十分に行われていない。	⇒ 特別活動を要とし、各教科の授業において、「カリマネデザインマップ」を活用した話し合い活動をより多く設定する。【各単元に1度以上実施する】

全国学力・学習状況調査 <小6・中3> (4月～5月)

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	B	学習教材を効果的に活用する点については、教員ごとの格差があり、課題が残ったが、話し合い活動の充実を目指すことにより、個別の暗記に頼るだけでなく、知識を“運用”しながら覚える仕組みを組み込むことができた。例えば、国語では語彙・文法を使った例文づくりを小グループで行い、互いの表現を比較して誤りを指摘し合ったり、数学で計算過程の違いや変形のポイントを説明し合う“ペア解説”を導入したりすることで、基礎技能の定着と誤概念の修正を促進できた。
思考・判断・表現	B	思考・判断・表現の向上には、「話し合い活動」を思考を可視化し構造化するための中心手段として機能させることが重要である。社会で、資料から読み取った事実を基に「何が/なぜ/だから」の因果構造をグループで組み立て、発表して相互比較をしたり、理科で、実験・観察の結果を共有し、仮説との関係を議論したりすることで考察の質が高められた。話し合いを“表現の型”と結びつけて活用することで、全教科に共通する思考力の土台を強化していく。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語については、(1)言葉の特徴や使い方に關する事項において、埼玉県平均(48.5%)、全国平均(48.1%)を上回る52%だった。数学については、埼玉県平均(55.7%)と全国平均(54.4%)よりも低い49.6%であった。国語については「文脈に則して漢字を正しく使うことができるかどうかをみる」問題において、全国・埼玉県平均を大きく上回ることができた。一方で、数学では「素数の意味を理解しているかどうかをみる」、「 1 次関数 $y=ax+b$ については、変化の割合を基に、 x についての増加量を求めることができるかどうかをみる」、「相対度数の意味を理解しているかどうかをみる」といった基礎的な問題に関しては、全国・埼玉県平均よりも10%以上下回っている。知識・技能についての問題についての無回答率は、国語・数学とどちらもほとんど全国・埼玉県平均と同程度であった。これらから、言語に関する基礎的な力は平均的に行っていることが分かるが、数学については、基礎的な問題を理解していないことがわかった。知識・技能においては特に数学の基礎的な内容の理解が不十分であり、学力の底上げが課題である。そのため、全教科で要請訪問を実施し、教職員の指導を向上に努めている。	
思考・判断・表現	国語については、おおむね全国(55.3%)・埼玉県(56.4%)と同等の正答率である54.7%だった。数学については埼玉県平均(41.0%)と全国平均(39.1%)よりも低い36.1%だった。国語では「資料を用いて自分の考えがわかりやすく伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる」、「文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えることができるかどうかをみる」問題について、全国・埼玉県平均よりも無回答率が2倍以上高かった。数学については「ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明する」問題について無回答率が全国・埼玉県平均よりも10%程度低かった。思考・判断・表現についての問題についての正答率は、国語・数学とどちらもほとんど全国・埼玉県平均と同程度であった。国語・数学ともに思考力を問う問題では平均並みの力がある。一方で、国語では表現力に課題が見られ、数学では証明問題への取り組みについても課題が見られ、全体の正答率は依然として低く、基礎学力の定着が課題である。そのため、全教科で要請訪問を実施し教職員の指導力向上を図っている。また、話し合い活動に取り組むことで生徒の思考力・判断力・表現力に努めている。	

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	市平均との差が大きいが、中2の「図形」「データの活用」では昨年度比で市との差の縮小が見られた。背景には、今年度進めた話し合い活動の充実により、定義や手順を言語化して相互に確認する場面が増え、誤概念の修正と基礎技能の定着が進んだことが大きいと考える。来年度も対話を核に、短時間・高頻度の確認と小テストで定着を図りたい。	
思考・判断・表現	市平均との差が大きいが、「国語の「話すこと・聞くこと」は昨年度比で改善し、市との差の縮小が確認できた。改善の主因は、今年度の話し合い活動で「根拠→理由→結論」を相互に組み立てる機会が増え、説明の型が共有・定着したためと考えられる。来年度も対話を授業設計の中心に据え、数学では複数解法の比較対話、国語・社会・理科では根拠提示型の口頭→記述への接続を徹底したい。	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	C	「スタディサプリ」「ドリルパーク」等、知識・技能を育成する教材を活用し、授業内だけでなく、課題として配信・配付することで、基礎的・基本的な内容の反復練習の機会とすることを策としていたが、各教科で使用している「ワーク」や教員の作成したプリントを使用した復習や予習が主となった。「スタディサプリ」については、課題配信を行った教科もあった。	変更なし
思考・判断・表現	B	特別活動を要とし、各教科の授業において、「カリマネデザインマップ」を活用し、全教科で連携をして行事にも関連した話し合い活動を全教科で行った。また、学習事項に関する話し合いについても実施した。話し合い活動については各教科の特性を生かしながら実施した。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)